

福岡県柳川市方言の記述研究

松岡, 葵

<https://hdl.handle.net/2324/7182261>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名 : 松岡 葵

論 文 名 : 福岡県柳川市方言の記述研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、福岡県柳川市方言（以下、柳川方言）の文法体系を明らかにすることと、日琉諸語内の多様性と規則性を明らかにすることである。本論文は2部構成の形式をとり、前者が第1部の内容に、後者が第2部の内容に相当する。以下では、それぞれの部ごとの内容をまとめる。

第1部は、全17章から成る。1章「対象とする方言の概要と第1部の前提」では、柳川方言の導入をおこない、第1部の前提を示す。前者について、柳川方言が話されている地理、方言区画及び系統、話者数を示すとともに、柳川方言のこれまでの先行研究を紹介する。後者について、第1部で扱うデータの詳細を述べるとともに、第1部における表記のルールを示す。

2章「音韻論」では、音韻体系を記述する。具体的には、音節構造、音素目録、アクセント、イントネーション、形態音韻規則の記述をおこなう。形態音韻規則で扱う内容のうち、1モーラ名詞の母音延長（例：*mee=kara*「目から」）については、1モーラ名詞の母音延長に、1モーラ名詞に後続する接語の種類、モーラ数、1モーラ名詞を修飾する要素の有無が影響していることを示す。

3章「記述の諸単位」では、語と接語と接辞、語根と語幹と語基、文法関係、品詞（語根類、語幹類、語類）、形態法を定義する。

4章「名詞類」では、名詞類を代名詞、呼称名詞、名詞、数詞に分類し、どのような接辞をとるかという内部構造を記述している。

5章「動詞の構造」では、動詞の構造と体系を記述している。まず、動詞語幹を子音で終わる子音語幹（*kak-*「書く」）、母音で終わる母音語幹（例：*tabe-/tabu-*「食べる」）に分類する。その上で、子音語幹と母音語幹の両方の語幹をとる動詞があること（例：*mir-/mi-*「見る」、いわゆるラ行五段化）を示し、いずれの語幹が現れるかの記述をおこなっている。その後、屈折接辞と派生接辞に着目し、これらの接辞が後続するときに生じる形態音韻交替を記述している。

6章「形容詞類の構造と体系」では、非屈折形容詞と屈折形容詞の記述をおこなっている。屈折形容詞については、柳川方言と同様に「カ語尾形容詞」（例：*hayaka*「早い」）と呼ばれる一連の語群をもつ方言においてこれまでとられてきた分析と比較し、本研究がとる*-kar*を屈折形容詞語幹化接辞と見る分析が優れていることを示す。

7 章「品詞の転換と指定」では、品詞の転換（例：動詞から名詞）および品詞の付与（例：品詞未指定から屈折形容詞）という操作をおこなう手段を記述する。

8 章「副詞」では、副詞に大きく二つの機能、すなわち動詞、形容詞を修飾する付加詞としての機能と、句や節の必須要素である補部としての機能があることを記述する。

9 章「助詞類」では、助詞のうち、取り立て助詞、接続助詞、終助詞を記述する。

10 章「その他の語類」では、連体詞、接続詞、間投詞を記述する。

11 章「品詞をまたぐ機能類」では、共通の語根をもち複数の品詞にまたがって実現する語群である指示語、疑問語を記述する。

12 章「名詞句」では、名詞句の内部構造、すなわち従属部と主要部にどのような要素が立つかを記述し、格助詞の記述をおこなう。特に、九州方言研究で注目されている形式名詞=*tu*/*=to* の使い分け、*differential argument marking* 現象に着目し、詳細な記述をおこなっている。

13 章「述語の構造」では、まず複合の結果生じた述語、補助要素構文、軽動詞構文の構造を記述し、それぞれ主要部にどのような要素が立つか、補助要素、軽動詞としてふるまう要素の機能は何かを記述する。その上で、*in=yatta* 「犬だった。」のような述語について、これが名詞述語であり、コピー動詞とそれが要求する項ではないことを示す。

14 章「単文の構文論」では、語順、格体系、文タイプ、極性、TAM、ヴォイス、待遇、可能表現、情報構造について記述する。

15 章「複文の構文論」では、等位接続節、従属節（副詞節、連体節、補文節）、節連鎖、脱従属化を記述する。

16 章「自然談話」では自然談話を、17 章「簡易語彙集」では簡易語彙集を示す。

第 2 部は、全 2 章から成る。18 章では、第 1 部 2 章で柳川方言について記述した 1 モーラ名詞の母音延長現象（例：*mee=kara* 「目から」）を対象とする。まず、日本語 8 方言を対象に当該現象の記述をおこない、柳川方言と同様に 1 モーラ名詞に後続する接語の種類、モーラ数が関与する方言があることを指摘する。その上で類型化と一般化をおこない、母音延長が生じる環境に階層性があることを指摘する。

19 章では、日琉諸方言における心情述語文の格標示に着目する。日琉 10 方言を対象に心情述語文の格標示における方言差を記述し、類型化をおこなう。そして、心情述語文の格標示に意味的結合価、意味役割、述語の品詞の三つが関与していることを示す。

本論文の意義は、以下の二つである。まず、第 1 部は、九州方言において初めての総合的な記述である。ある方言を総合的に記述するには、文法書、辞書、談話資料の三つが必要とされ、本論文の第 1 部はこの三つを備えた初めての研究である。次に、本論文の第 2 部は、第 1 部の記述データを踏まえた上で、これまで注目されてこなかった現象について通方言的な観点から比較している。従来の方言研究では、主に形式に着目した比較研究がおこなわれてきた。本研究は、形式ではなく体系を対象とする方言研究の先駆けであると位置付けられる。